

昭和49年8月1日(木) 時事解説 第3種郵便物認可

参院選の結果生じた田中内閣の小改造で、衆院外務委員長の木村俊夫氏が新しい外務大臣に就任した。

自民党のなかで、外交問題を高度のレベルで語れる人材はそう多くはないし、木村氏が佐藤政権の内閣官房長官、副官房長官、臨時外相代理の時期を通じて、外交問題に並々ならぬ熱意を示し、すでに少なからぬ貢献をなしてきたことを思えば、木村氏の外相就任は、むしろ選ずるべきともいえない。新外相には、それに

### ●外交時評

## 木村新外相への期待

中嶋領雄(東京外国語大学助教授)

加えて、国際政治や国際関係論についてたえず勉強を怠らないという学究的な癖合いがある。それだけに、国際環境の厳しい現実のなかで、わが国の外交を担うには、まさに適役であるともいえる。

しかも木村氏は今日、無派閥政治家であってこの点は野党の社会党のなかで、外交問題を国益の次元で語れる数少ない逸材としての羽生三七氏が、やはり無派閥政治家であるのと並んで特筆すべきことである。羽生氏の代表質問にたいして、木村外相が答弁に立つというような場

面こそ、与野党ともに果てしない衆愚政治の横行するなかで、ステイツマン同士が国を論じ、外交を語るといふ政治・外交の正道が開かれる新しい一ページになるのではないかと、期待されるのである。

いわゆる田中・大平外交の功罪については、やがて、その評価が定まる時期がくるであろうが、わが国の外交政策決定過程を学問的に研究する場合によく問題になることの一つは、わが国の場合、外相のポストがしばしば次期政権を



うかがう派閥のリーダーによって担われることであり、このことが、外交という長期的な国益を考慮してなされるべき政務に、さまざまな偏向と拘束をもたらすことのもつ意味についてである。

つまり、外交が政治家による一種の自己顕示の対象になりやすく、その結果、かけの外交にはしりやすいことのもつ危険性という問題である。そして、外務事務当局も、そのような政治家の思惑に流されやすいという今日の政治と官僚機構の体質の問題もあって、この点では、外

務大臣に外務官僚が就任することの久しくなくなった最近のわが国外相ポストのあり方そのものにも大きな問題があったといえない。外交とは本来、時流に乗ることなく、長期の国益を考えて、黙々と文書をとり込むことにその語源的な意味があることからしても、一連の日中外交に見られたように、いわば時流に乗じてかけの外交に徹した田中・大平外交には、理論的に見て、大きなわなが潜んでいたのである。もっと平たくいえば、うまくいっているとき

はいいが、ひとたび誤ったら大変なことになる危険といってもいいだろう。この点でも、権力の座を直接にうかがう立場にない無派閥政治家としての木村新外相は、まさに適役であって、新外相に期待するところ大なるものがある。

新外相は就任直後、日米友好関係を基軸にしたアジアの安定について語り、日台路線の回復やシベリア開発に関連した日ソ関係の強化、日韓関係の再調整などについて抱負を述べた。

その方向は、おおむね妥当なものであるだけに当面は大平外交に馴れた外務当局との若干の調整が必要であっても、七〇年代後半の日本外交を日米関係を軸に、世界に開かれた多元的外交として展開するために、また国際政治・国際経済・国際文化という現代外交の新しい三領域を包括した総合外交として展開するために、日本外交の新たな位置づけを着実に進めてほしいものである。